

版社
于晓飛『消滅の危機に瀕した中国少数民族の言語と文化』二〇〇五
明石書店

Bogoras, Waldemar 『The Chukchee』一九〇四 The Jesup North Pacific Expedition, Memoir of the American Museum of Natural History Vol. VII. (WEB [デジタルライブラリー digitallibrary.amnh.org](http://digitallibrary.amnh.org))
Bogoras, W. 『Tales of Yukaghir, Lamut and Russanized natives of Eastern Siberia, Tales of Eastern Siberia』一九一八 Anthropological Papers American Museum of Natural History. Vol. XX, Part I, New York. Published by order of the trustees
Jochelson, Waldemar 『The Koryak』一九〇八 The Jesup North Pacific Expedition, Memoir of the American Museum of Natural History Vol. VI. (WEB [デジタルライブラリー digitallibrary.amnh.org](http://digitallibrary.amnh.org))
Jochelson, W. 『Yukaghir and the Yukaghirized Tungus, Part I』一九一〇 The Jesup North Pacific Expedition, Memoir of the American Museum of Natural History Vol. IX, Part I. (WEB [デジタルライブラリー digitallibrary.amnh.org](http://digitallibrary.amnh.org))
Jochelson, W. 『The Yukaghir and the Yukaghirized Tungus, Part III』一九二六 The Jesup North Pacific Expedition, Memoir of the American Museum of Natural History Vol. IX, Part III. (WEB [デジタルライブラリー digitallibrary.amnh.org](http://digitallibrary.amnh.org))
Curtin, Jeremiah 『A Journey in Southern Siberia—The Mongols, their religion and their myths』一九〇九 Little, Brown and Company (Boston)
WEB [上で公開されています。 https://www.sacred-texts.com/asia/jss/index.htm](http://www.sacred-texts.com/asia/jss/index.htm)

Czaplicka, M.A. 『Shamanism in Siberia excerpts from Aboriginal Siberia—A study in Social Anthropology』一九一四 <https://sacred-texts.com/sha/si/index.htm>

Lopatin, I.A. (Лопатин И. А.) 『Топись : Амурские, Уссурийские и Сунгарийские』一九三五 Г. Браунроокт. (トリス族：ムール、ウスリー、スンガリー河流域)
Shirokogorov, S.M. 『Psychomental Complex of the Tungus』一九三五 Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., LTD. LONDON
PDF: https://openlibrary.org/works/OL6682722W/Psychomental_complex_of_the_Tungus
http://www.shirokogorov.ru/s-m-shirokogorov/publications/psychomental-complex-tungus-01_02_03_04
シロコトフ著 川久保悌郎・田中克己訳 『北方ツングースの社会構成』一九八二 岩波書店
ウノ・ハルヴァ著、田中克彦訳 『シャマニズム—アルタイ系諸民族の世界像—』一九七一 三省堂
若松寛訳 『ゲセル・ヒーロー物語—モンゴル英雄叙事詩』一九九三 東洋文庫五六六 平凡社
サランコフ「内モンゴル」@ホルチン地方の靈魂観と悪霊に「ツング」
『比較民俗研究』j26. 2011/6 二〇一一 WEB [デジタルライブラリー](http://www.comparativefolklore.com)で入手可能
Boas, F. 『Tsimshian Texts』一九〇一 Smithsonian Institution, Bureau of American Ethnology, Bulletin 27, Washington
WEB: <http://www.archive.org/details/cu31924027107816> (つ・しやうひ／日本大学法学部)

「かちかち山」の国際比較 —モティーフと文化の共通性—

一 はじめに

「かちかち山」の昔話は広く知られているが、大変に不合理的な展開といえる。子どもの頃、本でこの話を読み、兎の徹底的な懲らしめに驚いた記憶がある。また、狸の行動も兎に劣らず冷酷で残忍なところがある。現代でもその内容がしばしば話題になったりする¹⁾。

本稿では「かちかち山」の昔話をモティーフのレベルでの国際比較を試みる。すでに「かちかち山」については、国内の研究が進んでいることを先行研究の紹介で示しておいた。ただし、国外との研究はまだ研究の余地があり、今回は「かちかち山」と同じモティーフを持つ、海外の資料との比較を中心に、分析し考察を行うことにする。

三章以下では、日本の「かちかち山」のモティーフである「婆汁」「かちかち鳥」「尻の栓」「木舟泥舟」と、共通する諸外国の

川村 直人

同一モティーフを表にして対照する。国際比較は言語の障害があり、容易にできるものではないが、昔話の背景となる民俗や生活、文化的背景を考慮しながら慎重に進めたい。

「かちかち山」は日本では一つの話型として安定しているが、国外で同じ話型のものを見つけることは難しい。しかし、モティーフのレベルでの類似は国外でも多く見つけられるので、本稿はそうした点から「かちかち山」の国際比較についての問題提起できればと考えている。

二 「かちかち山」の先行研究

「かちかち山」の研究に先鞭をつけたのは柳田國男の「かちかち山」(一九三六年)で、その後の研究のベースになっている。柳田は「かちかち山」を三つに分け、第一を「爺が狸を捕まえる」、第二を「狸が婆を殺し逃げる」、第三を「兎が狸に仇討ちする」とし、それらはもともと独立した話であったとする。な

ぜそのような形になったのかは、叙述方法や聞き手の問題が関わっていると述べる。

続く関敬吾は『昔話と笑話』（一九六六年）「かちかち山の構造」で、「かちかち山」の構成を、次の三つに分ける。

①爺が狸を捕まえ、狸は婆を殺して爺に食わせて逃げる。

②兎が狸を懲らしめ仇討ちする。

③兎が殺した狸を人家で料理して食い、鍋に糞をする。怒った家人が鉈を投げ兎の尻尾を切ったので兎の尾は短い。

さらに、この三つの要素の組み合わせから、「かちかち山」を次の五つのサブタイプに分類する。

A型 ①単体のサブタイプ

B型 ②単体のサブタイプ

C型 ①と②が結合したサブタイプ

D型 ②と③が結合したサブタイプ

E型 ③単体のサブタイプ

関は「かちかち山」の成立をD型のサブタイプを中心として、その行為の説明として①が結合したのではないかと述べる。また関は、アールネがタイプインデックスで示した「建築モテーフ」を持つ話型（AT四三）として、「かちかち山」をとらえている。

鳥居訓子の「かちかち山」の話型研究（一九九一年）は、これまでの「かちかち山」の論考でもっとも詳細に及んでいる。一章を「狸の婆汁」、二章の「兎と熊」では内外の資料を比

較し、三章の「かちかち山」で全体の構成に触れ、「かちかち山」は複合昔話であると結論づける。「昔話において世の中が不安定から安定に向かう話を好んだ時代、文化圏の人々によって、この二つの話が複合したのである。」と述べ、「婆汁」と「兎と狸の葛藤」の話型の複合理由を時代や文化圏の問題に求めている。

熊倉史子「昔話「かちかち山」の「建築モテーフ」の話型と分布」（二〇一〇年）は、関の指摘した「建築モテーフ」の日本における分布状況を示し、日本の「かちかち山」では建築よりも狸の背中焼きに関心があると指摘する。また、関の分類の③「兎の尾由来型」が、なぜ兎と狸の葛藤に結合したかについて、兎が一方的に狸を懲らしめるのに、「さらに人間を介在させ、兎にも制裁が加えられる結末になったのではないだろうか」と推測している。

ここまでは国内の「かちかち山」の研究であるが、次は国外との比較研究を取り上げる。斎藤君子は「かちかち山」とツングース諸民族の狐物語（一九八八年）という論文で、日本の「かちかち山」が複数のモテーフが鎖状に繋がっている特徴を踏まえ、比較のために、「かちかち山」のモテーフを九つに分解し、シベリアのオロチとナナイの「かちかち山」と対照している。

巧上」の面から「樹脂・齧モテーフ」「カチカチ鳥」などの資料との比較を試みている。

以上の先行研究を確認したところで、筆者の「かちかち山」の国際比較のための卓見を述べる。日本の「かちかち山」は話型として安定しているが、類似する話型を世界の昔話から見つけ出すことは、現在のところできていない。これからも探し出す努力はするが、ただモテーフレベルでの類似や一致等は散見される。日本の「かちかち山」の特徴や独自性を明らかにするために、海外との類似モテーフとの比較を通して、文化的、生活的な背景を探っていくことにしたい。

三 「婆汁」モテーフ

この章では、国外の昔話に見られる「婆汁」モテーフを取り上げて比較分析し、その特徴などについて考察する。その前に、日本の「かちかち山」のモテーフ構成を整理しておきたい。前述の斎藤の論文に倣い、日本の「かちかち山」を、次の1から9のモテーフに分解する。（一）内はモテーフ名を示す。

1 爺が「一粒蒔けば千粒」と豆を蒔いている（畑を耕している）と、狸（貉・猿）がやってきて邪魔をする。……（種蒔き妨害）

2 爺はその狸を糶（膠・水あめ・そばがき）でつかまえる。

……（狸の捕獲）

3 狸は家で婆の米つきを手伝うと言って騙して殺し、婆汁にする。帰ってきた爺が婆汁を食っていると、狸が「婆汁食った」と嘘して逃げる。爺はかまどの裏（軒下・仏壇・棚）に婆の死骸を見つける。……（婆汁）

4 兎が狸（熊・猿）を萱刈りに誘う。帰り道に兎は狸の背中の萱に火をつける。火打石を打つ音は「かちかち山のかちかち鳥」。火が燃える音は「ぼうぼう山のぼうぼう鳥」と言って騙す。……（かちかち鳥）

5 兎は葉屋を装って狸の前にあらわれ、背中に唐辛子味噌（蓼味噌・辛子味噌・塩など）を塗る。……（味噌塗り）

6 兎は尻に栓をすれば食べ物を食べなくて済むと言って、狸の尻に栓をする（膠を塗る）……（尻の栓）

7 兎は狸を魚取り（舟遊び）に誘い、狸は泥の舟、自分は木の舟に乗る。兎は歌を歌って（舟を叩くと魚が寄ってくると言って）舟べりを叩かせ、狸の舟は沈む。……（木舟泥舟）

8 兎は死んだ狸を人家に連れて行き、子供に鍋を借りて狸汁を作って食べ、鍋に糞をする。……（狸汁）

9 帰ってきた親が兎を捕まえ、子供に鉈（包丁・鎌）を持って帰ってくる。子どもは間違えて杓子（すりこぎ・箸）を持って行く。親は子供に兎を押しさええ、自分で鉈をとりに行く。兎は子供に親父の局部の大きさを聞く。子ども

が手を放して説明すると兎は逃げる。親が投げた鉞が兎の尻尾にあたって、兎の尻尾は短くなる。……(兎の尻尾)

以上の九つの展開のうち、まずは3の「婆汁」を取り上げる。

「婆汁」は、柳田が「主客転倒」と指摘したものであるが、柳田のいう「主客」とは誰と誰なのか説明はない。しかし、ここでは「主人公」と「敵対者」のこととらえて、婆が「主」で狸が「客」とする。この「主客転倒」に関しては、ATU三二七B「兄弟たちと鬼」を例に、日本との比較を考えてみる。

例えば、『フランス民話集』「悪魔の話」では、両親に捨てられた兄弟が悪魔の家に行き、悪魔の子の金の指輪と、自分たちのエニシダの指輪とをすり替えて、悪魔に自分の子を食べさせて逃げる。「主人公」である兄弟は「敵対者」である悪魔から逃れ、無事に生還する。「かちかち山」の「主人公」の爺が、妻の婆を食われるのと共通する。

この「婆汁」モチーフと同一モチーフを集め、次の比較表を作成した(表1)。構成要素の「登場物①」は主人公に近い存在で、「登場物②」

のも、普通の肉ではなく、身内を食べたことを暗に示した表現といえる。

ところで、身内を食べる日本の事例に、鹿児島県沖永良部島の「話千両」がある。「目は眠っても肝は眠ぶんな」という諺を聞いた主人公が人食いの家に迷い込み、忠告通り眠らずにいて、娘の布団と自分のものを交換しておく。母親の人食いが知らずに自分の娘を食うが、脂が濃くて食えないので、明かりをつけて自分の娘だったことに気づく。

比較表における近親のカニバリズム(人肉嗜食)の事例が、鬼や魔女などの非人間的存在であるのに比べると、日本の婆汁は異常といえる。柳田が「主客転倒」と問題提起したのも、直感からくるものであろう。しかし、なぜそうだったのかは依然不明であるが、当面は世界との違いを指摘しておくにとどめておきたい。

四 「かちかち山」の諸モチーフ

さて、この章では前述したモチーフのうち、4「かちかち鳥」、6「尻の栓」、7「木舟泥舟」のそれぞれのモチーフについて検討する。

(1) 「かちかち鳥」モチーフ

「かちかち鳥」モチーフの比較表を、「燃烧物」、燃える火の「擬

【表1】「婆汁」モチーフを持つ昔話

	地域	登場物1	登場物2	犠牲者	殺害法	食感	結末	出典
参考	日本・山形県	(狸)	(爺)	婆	杵で叩く	固くて食えない	狸は逃げて兎が仇討ちをする	『真室川の昔話一鯉の大助』
1	シベリア ユカギール	オールド＝ ブロック	魔女 (ヤガー)	魔女の娘	竈に押し込む	身内の味	魔女は死の井戸の水を飲み死ぬ	『エスキモーの民話』
2	シベリア ヤクート	チャーチカン	大食漢	大食漢の子どもたち	首切り	身内の味	大食漢は首を切られて死ぬ	『アジアの民話3—北方民族(上)の民話』
3	アイス	パナンペ、 ベナンペ	鬼	鬼の子どもたち	首切り	身内の味	パナンペは宝を持って逃げる。ベナンペは真似をして、鬼に食われる。	『アイス民譚集』
4	インドネシア サンギル島	兄弟と妹	鬼(バケ)	鬼の娘	料理する	人間の指	川で溺死	『インドネシアの民話』
5	インドネシア ロティ島	兄弟	山姥(ホロキウ・キナ)	人間の娘	料理する	人間の指	物を投げつけ兄弟は逃げる。山姥は死んだあと蛆になり、ヒツジになる	『インドネシアの民話』

音、「擬音の説明」という要素項目で整理した(表2)。このモチーフがあらわれる場面について少し触れると、1は洞窟に追い込んだ熊女たちを焼き殺す場面。2では主人公がフィリアザラシの家に自ら忍び込み、火をつける場面。3では兎が虎を懲らしめる場面。4は話の前半部分で、後半部分で地獄からの使者として馬頭鬼があらわれる場面がこのモチーフがあらわれる。5では虎に対する一連の騙しの技法のひとつとして、6では動物たち

はその対立者である。「犠牲者」は食われる者で、「殺害法」は殺害の仕方および殺害の目的をさす。「食感」は歯ごたえ舌ざわりなどの感じをいう。なおこのモチーフがあらわれる場面は、いずれも主人公(登場物1)が対立者(登場物2)の家に忍び込んだ、あるいは連れ込まれた場面に続く。まず、「犠牲者」は人食いの子であるが、5の話では鬼婆の家に入った人間の娘が鬼婆に調理される。「殺害法」の4と5で「肉料理」にして食わせるのは、日本の「婆汁」の調理と同様といえる。また、2、3の「首切り」は、手伝いを口実に殺すもので、狸のやり方に近い。次に、「食感」で、身内の味がする(1、2、3)、人の指(4、5)とするのは、爺が婆の肉ではと怪しむのに通じている。日本の伝承事例で「肉が固い」とか「こんなうまい肉は食べたことない」とある

【表2】「かちかち鳥」モチーフを持つ昔話

	地域	登場物1	登場物2	燃烧物	擬音	説明	出典
参考	日本・山形県	兎	狸	背負子の柴	カチカチ、ポウポウ	カチカチ鳥、ポウポウ鳥	『真室川の昔話一鯉の大助』
1	北アメリカ アラバホ	蜘蛛男	熊女	草		火打ち石鳥、煙鳥、熱の鳥	『アメリカ・インディアンの民話』
2	シベリア・オロチ	人間	フィリアザラシ	アザラシの家	チュクチュク	チョクチョコ鳥の声、浪の音	『「かちかち山」とツングース諸民族の狐物語』『なろうど』16号
3	韓国京畿道始興郡	兎	虎	竹やぶ	うー、うー	鳥の羽音	『朝鮮昔話百選』
4	中国・達斡爾族	人間	馬頭鬼	車に積んだ薪	がちゃん、ばちばち	がちゃん鳥、ばちばち鳥	『中国達斡爾(ダオール)族物語』
5	ミャンマー・カチン	人間	虎	穴の周りの草	ばちばち	空が落ちる音	『アジアの民話1 ビルマの民話』
6	インドネシア・チャム	兎	象	背中の萱		兎の吐く息	『チャムの動物寓話』『民話と文学』9号

が萱刈をし、象の背中に乗ったウサギが萱に火をつける場面と
なっている。

「燃焼物」は背中の中、萱、車の薪、住居や、近くの草など一定し
ないが、相手を焼き殺そうとする意図という点では一致する。
燃え方のパチパチは日本と同様だが、チュクチュク、ウーウー
は日本語の擬音表現とは異なる。その擬音の説明を鳥名や、波
の音といった自然音に関係づけて説明するのは、自然の中で暮
らす人々の共通性からくるものである。また動物同士の葛藤
譚では、人工音を比喩に使うのはあり得ないであろうから、自
然の音になるのだとも考えられる。

日本の「かちかち山」で兎が狸の背で火をつける音を「かち
かち鳥」、燃える音を「ぼうぼう鳥」とごまかすのは特別に印象
的なものであるが、これについてはモティーフ全体のまとめの
所で触れるとして、ここでは「登場物」①と②の關係に注目し
たい。

「登場物」が動物同士(3・6)、人間対動物(2・4・5)、
1は擬人動物という關係である。さまざまな組み合わせになっ
ているが、この話が本来「動物葛藤譚」であるとすれば、人間
を登場してくるのは後の変化ということになるだろうか。

というのは、「牛方山姥」では、牛方が釜に入った山姥を焼き
殺す際に、火打石を打つ音を「かちかち鳥が鳴く」と寝言を言
うこととも關係する。さらには、日本の「かちかち山」の場合、
「兎と狸の葛藤」タイプの前後に人間が登場する。前は「婆汁」

よって尻の栓を抜かれて目論見が崩れてしまう。2は木霊と虎
の葛藤譚で、イノシシの腸を虎に食わせ、もつと食べたいと言
う虎に、虎自身の腸を食べさせると言って、楔を打ち込む展開
となっている。

日本の「かちかち山」の場合、狸、熊にかぎらず「尻の栓」
モティーフの分布は東北地方や北陸地方にのみ見られる。熊の
習性に冬眠の前に消化の悪いものを食べ、それによって肛門に
栓をする「止め糞」という習性があるが、こうした動物の生態
がこのモティーフに反映されているのではないだろうか。

しかし、中国の虎の場合は「止め糞」の習性がないためあて
はまらない。実際の習性とは別の論理が働いているのかもしれない。
たとえば『韓国昔話集成』二巻には「虎を捕った老人」
という話型が収録されており、老人が虎の肛門に槍を突き通し
て殺している。動物の殺害法が文芸技巧として用いられている
のかもしれない。虎と同じく狸も冬眠しないことから考えると、
「尻の栓」をそのようにとらえることができる。

(3) 「木舟泥舟」モティーフ

最後に7の「木舟泥舟」モティーフについて考察する。これ
までの先行研究では「木舟泥舟」の国際比較については触れら
れてこなかった。話型を横断するために慎重に扱ったからであろ
うか。ここでは表4に、類似の事例を集めて一覽表にした。構成
要素の「乗り物」「乗り物の破壊」について検討する。

モティーフ、後は「狸汁」「兎の尻尾」モティーフであり、動物
と人間とが混在する。このことを解くヒントを与えてくれるよ
うに思われる。ただ、今は事例が少なく判断が恣意的になりそ
うなので、もう少し事例を多く集めてから検討していきたい。

「登場物」の組み合わせは別として、登場物の両者の關係で共
通するのは、非力で利口な生き物と、強
大で愚かな動物との対立という点の一致
である。これは叙述のコントラストとい
う面と同時に、昔話一般において、弱者
が強者に打ち勝つという主題を内包して
いることに起因するかもしれない。しか
し、これも昔話全体からの検討が必要と
いえる。

(2) 「尻の栓」モティーフ

「尻の栓」モティーフに関しては、類似
性のモティーフを多く集めることができ
なかつた。表3「尻の栓」比較表」には、
齋藤が取り上げたナナイの資料と、中国
の苗族との資料を紹介する。

1は動物同士の葛藤譚で、カラスとフ
ナの喧嘩を仲裁するため、熊が尻に栓を
して湖の水を飲み干そうとするが、狐に

【表4】木舟泥舟モティーフ

	地域	登場物1	登場物2	乗り物	乗り物の破壊	出典
参考	日本・山形県	兎	狸	杉船・泥船	歌いながら舟を叩く	『真室川の昔話一鱈の大助』
1	サハリン・アイヌ	パンナベ	熊	木舟・泥舟	呪い	『北方文化研究』10巻
2	サハリン・アイヌ	パンナベ	熊	木舟・泥舟	呪い	『北方文化研究』10巻
3	中国・福建省・漢族	頓智男	高利貸	古桶・きれいな水がめ	甕を叩く	『中国の民話101選』
4	中国	賢い百姓	欲深な百姓	桶・甕	歌いながら甕を叩く	『中国昔話集2』
5	インドネシア・マール諸島	レタオ	酋長	速い舟・美しいが浮かない舟	×	『アジアの民話6 ミクロネシアの民話』
6	インドネシア・サンギル諸島	白鷺	猿	土焼きの鍋	ヤシの実を割る	『インドネシアの民話』

要素について見ると、こ

こでも「登場物」が1・2
では人間対動物、3・4・
5では人間対人間、6では
動物同士の葛藤となつてお
り混在している。このうち
注目すべきは、3と4は
「俵薬師」の話の結末部分
に、この「木舟泥舟」モ
ティーフが出てくることだ。
利口で知恵ある動物が愚か
な動物をやり込める話が、
狡猾者の「俵薬師」に出て
くるのは、動物葛藤譚から
の影響であろう。

「乗り物」については1・
2の木舟と泥舟で「かちか
ち山」と同じ組み合わせと
なっている。3・4では桶
と水がめ、5では速い舟と
美しいが浮かない舟、6は
土焼きの鍋に乗る。また、
3と5は実用性と美しい物

【表3】「尻の栓」モティーフを持つ話

	地域	登場物1	登場物2	尻の栓の理由	出典
参考	日本・青森県	兎	熊	腹が減らないように尻に膠を塗る	『手つきり姉さま』
1	シベリア・ナナイ	カラス(狐)	フナ(熊)	熊は水を飲むために尻に栓をする	『シベリア民話集』
2	中国・苗族	木霊	虎	腸を出して食わせると言い、尻に楔を打ち込む	『苗族民話集—中国の口承文芸2』

との対比となっているが、日本の「かちかち山」にもこうした例は見られる。

「乗り物の破壊法」は1・2では「土の舟、溶けろ」と唱えろと溶け、5では最初から浮かばずに沈む。3・4・6の舟を叩くように仕向けて舟が割れるというのは、日本の「かちかち山」に多く見られる。その場合には、舟歌を歌いながら叩かせるのと、舟を叩くと魚が寄ってくるからと叩かせるものがある。

この章では「かちかち山」の各モティーフを分解し、それらと似たモティーフを持つ海外の事例と比較してきた。ここでもう一度、日本の「かちかち山」の題名ともなる「かちかち山」モティーフについて取り上げる。

「カチカチ」の類似音にシベリアの「チュクチュク」や中国、ミャンマーの「パチパチ」「ガチャン」があり、これらは火をつける際の火打ち石を打つ音からくるものと思われる。すなわち二つの石（火打ち石と火打金）を激しく打って火花を出し、火を得るもので、これらの発火法が共通する音の表現を構成するものといえる。

ちなみに、日本ではヒタキを「カチトリ」や「カネタタキ」などと呼ぶ地域がある。ヒタキの名は鳴き声如火打ち石の「カチカチ」の音に似ていることから命名されたといひ、ジョウビタキ、ルリビタキ、キビタキなどの鳥がいる。『枕草子』第四十一段でも「火焼（ヒタキ）」と出てくることから古い鳥名である。

を避けなければならない。ただ、敵対者を欺く方法としてのトリック的モティーフとしては有効であり、多くの場面で使われることが多い。

続く「かちかち鳥」モティーフにおける火をつける擬音や鳥名が一致するのは、火打ち石による発火法が背景にあるからととらえた。昔話は生活基盤をもとに発想され、また形成、叙述される口承文芸であり、世界の語りとの一致の一面を示しているといえる。

日本の東北地方などに多い「尻の栓」モティーフについては資料数が少なく、シベリア、中国少数民族の事例を検討しながら、熊が冬眠のための「止め糞」の習性が背景にあることを確認した。ただ、事例が乏しく、中国の場合は動物の殺害のために尻を刃物で刺すもので、文芸的技巧の面もあり、事例を多く集めて再検討する必要がある。

「木舟泥舟」モティーフは、細部にわたる共通する事例があり、これも背景に舟上での作業の一致ということが考えられる。モティーフの根底には民俗や生活文化の共通性があり、そうした面からの国際比較は有益であろう。

以上、明らかにできた面もあるが、今回意図していて触れられなかったものに、「膠で狸を捕まえる」というモティーフがある。このモティーフはATU一七五番の「タール人形と穴ウサギ」に近いモティーフとしてすでに伊藤清司が触れており、アメリカの民俗学者エスピノーサの論文「Notes on the Origin and

キビタキの棲息地域はサハリンから中国北部、日本列島全域で、夏に繁殖し冬は東南アジアに渡り越冬するのだという。キビタキが必ずしも他国の「かちかち鳥」だとは限らないが、鳥を日常的に目にしたり、鳴く声を聞いたりする経験が、どの国においても「かちかち鳥」モティーフの背景にはあるのではないだろうか。

五 おわりに

本稿では「かちかち山」のいくつかのモティーフの比較を通して、共通点や相違点などの分析、考察を深めてきた。その内容を再度、整理、確認しながら、本稿の研究で明らかにできた点や、今後の課題等に触れていきたい。

最初に、これまでの「かちかち山」の先行研究を紹介しながら、本稿の問題点を明確にし、諸外国の同一モティーフとの比較を試みてきた。まず「婆汁」モティーフを取り上げたが、早くに柳田國男は、この「婆汁」を「主客転倒」であるとするとして問題提起を示した。本稿はそれを受ける形で比較検討した結果、外国の事例は爺が婆汁を食うという近親の肉食嗜好ではなく、鬼や魔女など非人間的存在が自分の娘を食うという展開になっている。日本の場合が特異な例であることを明らかにした。

カニバリズムという習俗と話の世界とは一致せず、その混同

History of the Tar-Baby story」(一九三〇年)を始めとする国際比較による研究があった。今回は「かちかち山」と関連付けて考察するに至らなかったが、今後の課題としたい。

今回モティーフの比較として挙げた諸外国の類話は、もっと多くあるはずで、今後も資料の収集を怠らずに、そしてそれらを用いての分析、考察を深め研究を継続していきたい。

注

(1) たとえば二〇一三年十一月九日に放送された「世界一受けたい授業」(日本テレビ)では「かちかち山の結末が変わった!」として「かちかち山」が「誰も死なない」形に変わっていると主張している。その内容がなぜか二〇一八年頃にツイッターで話題になるなど、この番組はネットに影響を及ぼしている。「かちかち山」の残酷性と子どもに関する研究としては、幾本幸代「カチカチ山」を小学生はどう受けとめるのか」『児童文学論叢 一 二号』二〇〇七 日本児童文学学会 中部支部、服部裕子「昔話の残酷性に対する大学生の意識について—絵本「かちかち山」の比較を通して—」『名古屋短期大学研究紀要四五』二〇〇七名古屋短期大学などの研究がある。こうした残酷性についての現代的な動向については今回触れないが、「かちかち山」の現代的な問題として示しておきたい。

(2) 柳田は「かちかち山」で「誰にでもすぐ眼に著く三つの部分

二つの繋ぎ目といふものが此童話にはある」と述べている。
(3) 厳密には「かちかち山の構造」ではC型を「一般的な「かちかち山」としてアルファベットを割り振っていない。このA～Eまでの分類は『日本昔話大成』での関の分類から引用している。

(4) 異なる種の動物が家を建てる動物葛藤譚にあらわれるモティーフの一つで、ATUでは四三「熊は木の家を建て、キツネは氷の家を建てる」の話型にあらわれる。

(5) 柳田は「かちかち山」で「第二段の婆を料理して、狸汁と偽って爺に食べさせるといふ話が、どうして生まれたらうか考えて見たい。是はグリムなどの説話集に勇敢なる童子が鬼の子と寝床など換へ、又は冠などを取って被つて、親鬼にまちがへて自分の子を食はせるといふのと近く、(中略)、普通にはさういふ目に遭ふのは鬼であり、騙して通じて来るのは英雄であり、その説話の主人公である。然るに日本では不思議に此個条が遊離して、主客をとりちがへて別の話にも附いて居る。」と述べている。ここで例に挙がっているのはペローの「親指小僧」だと思われる。

(6) 『全国昔話資料集成三九沖永良部島昔話集 鹿兒島』(一九八四年)より。この話は『日本昔話大成』九巻「話千両」の項目の例話にもなっている。

the Tar-Baby story」『The Journal of American Folklore, Vol. 43, No. 168』一九三〇 American Folklore Society

【表1】

参考 野村敬子『真室川の昔話―鯉の大助』一九八一 おうふう
1 ハワード・ノーマン編 松田幸雄訳『エスキモーの民話』一九九五 青土社

2 C・Fコックススウェル 渋沢青花訳『アジアの民話三 北方民族(上)の民話』一九七八 大日本絵画巧芸美術

3 知里真志保『アイヌ民譚集』一九三七 郷土研究社
4 ヤン・ドゥ・フリース編 斎藤正雄訳『インドネシアの民話―比較研究序説―』一九八四 財団法人法政大学出版局

5 4に同じ
【表2】

参考 野村敬子『真室川の昔話―鯉の大助』一九八一 おうふう
S・トムスン編 皆河宗一訳『民俗民芸双書四九アメリカ・インディアン』一九七〇 岩崎美術社

2 斎藤君子「かちかち山」とツングース諸民族の狐物語」『なろう』二一六号』一九八八 ロシア・フォークロア談話会

3 関敬吾監 崔仁鶴編『朝鮮昔話百選』一九七四 日本放送出版協会

4 孟志東編 珠栄 嘸竹中良二訳『中国達斡爾(ダオール) 族物語』二〇〇二 日本橋報社

5 ルドゥ・ウー・フラ 古橋政次 大野徹訳『アジアの民話―ビルマの民話』一九七八 大日本絵画巧芸美術

引用・参考文献

【二章】

柳田國男「かちかち山」『昔話と文学』一九三八 創元社
関敬吾「かちかち山の構造」『昔話と笑い話』一九六六 岩崎美術社

鳥居訓子「かちかち山」の話型研究」『昔話の成立と展開 土曜会昔話論集I』一九九一 昔話研究士曜会

熊倉史子「昔話「かちかち山」の「建築モティーフ」の話型と分布」『昔話―研究と資料―第三十八号』二〇一〇 日本昔話学会
斎藤君子「かちかち山」とツングース諸民族の狐物語」『なろう』二一六号』一九八八 ロシア・フォークロア談話会

伊藤清司「カチカチ山の比較」『昔話伝説の系譜―東アジアの比較説話学―』一九九一 第一書房

【三章】

ハンス・ライエルク・ウター 加藤耕義訳 小澤俊夫監『国際昔話話型カタログ―分類と文献目録―』二〇一六 小澤昔ばなし研究所
新倉朗子編訳『フランス民話集』一九九三 岩波書店

関敬吾編『全国昔話資料集成三九沖永良部島昔話集 鹿兒島』一九八四 岩崎美術社

【四章】

崔仁鶴 嚴鎔姫編著 李権熙 鄭裕江訳『韓国昔話集成第二巻』二〇一三 悠書館

【五章】

アウレリオ・M・エスピノーサ『Notes on the Origin and History of

6 コーワン 斎藤正雄訳「チャムの動物寓話」『民話と文学 第九号』一九八一 民話と文学の会

【表3】

参考 能田多代子編『手つきり姉さま―五戸の昔話』一九五八 未来社
1 斎藤君子編訳『シベリア民話集』一九八八 岩波書店
2 村松一弥編訳『苗族民話集―中国の口承文芸二』一九七四 平凡社

【表4】

参考 野村敬子『真室川の昔話―鯉の大助』一九八一 おうふう
1 知里真志保『アイヌの散文物語―北方文化研究十号』一九五五 北海道大学北方文化研究室

2 1に同じ
3 人民中国編集部『中国の民話一〇一選 第一巻』一九七三 平凡社

4 馬場英子 瀬田充子 千野明日香訳『中国昔話集二』二〇〇七 平凡社
5 ロジャー・E・ミッチェル 古橋政次訳『アジアの民話六 ミクロネシアの民話』一九七九 大日本絵画巧芸美術

6 ヤン・ドゥ・フリース編 斎藤正雄訳『インドネシアの民話―比較研究序説―』一九八四 財団法人法政大学出版局
(かわむら・なおと/國學院大學大学院)